

## 書評

齋藤徳美著

## 『岩手・減災 近年の足跡』

『これからも生かされていく私たち』

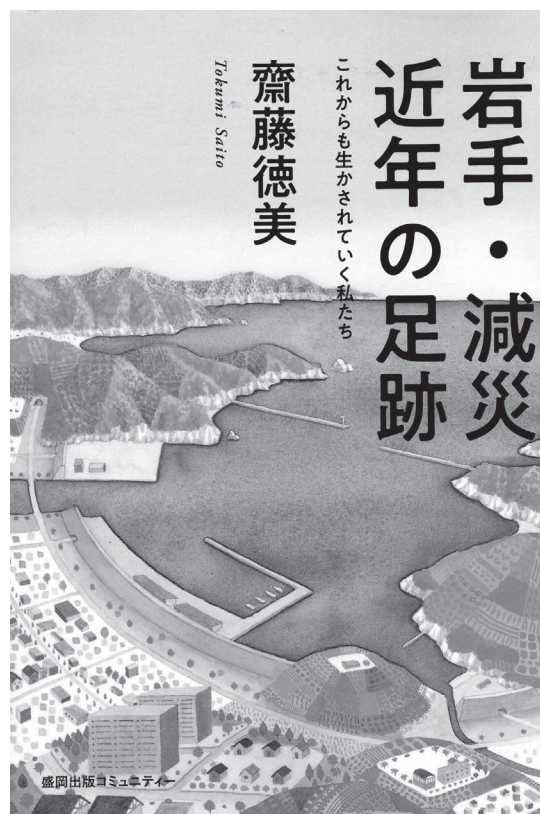
目時和哉

齋藤徳美『岩手・減災 近年の足跡 これからも生かされていく私たち』, A5判, 402ページ, 2023年, 盛岡出版コミュニティー, 1,650円(税込)

本書の著者である齋藤徳美先生は、日本列島全域が相次ぐ大規模災害に見舞われた20世紀末以降、岩手県における減災及び災害復興の要としての重責を担われてきた。先生が多年にわたり教鞭をとられていた岩手大学の大学院で防災とまちづくりについて勉強中の身である私のような者が高著を評するのは甚だ分不相応ではあるものの、一般の方にも広く読まれるべき本書について、一読者としてその魅力や重要性について述べることで責めを塞ぎたい。

本書は齋藤先生が岩手日報紙上におよそ2年半にわたり毎週続けられた連載記事を一書にまとめたものであり、連載時点でのタイトルである「猛威と闘う」の方に馴染みのある読者も多かろうと思う。題について言えば、書籍化に際して大きく改められることになったが、私自身がもっとも感銘を受けた点の一つが、副題として掲げられた「これからも生かされていく私たち」というフレーズであった。それが意味するところは読み進めるにつれて明らかとなっていく。

本書は、4つの章からなり、地震、津波、火山、豪雨という、日頃私たちが脅かす災害について、岩手県における動向を余すところなく伝える。東日本大震災以前から、一般家屋の建て替えのタイミングである50年後の防災都市構築を掲げて、産学官連携によりその機運を高めていたこと。阪神・淡路大震災で自衛隊の作戦部長を務めた越野修三防災危機管理監や、岩手県消防防災課



長のキャリアを持つ本田敏秋遠野市長（肩書はいずれも当時）をはじめ、運命的とさえいえる関係者のめぐり合わせが、岩手県における東日本大震災への諸対応の追い風となったこと。ある意味で「空振り」に終わったともいえる平成の岩手山噴火危機への対応は、その実薄氷を踏むような「空振り」だったのであって、なぜ危機が収束したのか、いつ同様の危機が再燃するのか、明確にするのは困難であること。

最前線で災害対応にあたった著者による描写は緊迫感や生々しさを伴って、私たちが享受している日常の安穩を担保する防災・減災体制がいかに構築されてきたのか、その過程を浮き彫りにする。きわめて個人的な述懐となるが、こうした事実を目の当たりにした時、中津川にかかる下ノ橋のたもとにたたずむ、明治43年の洪水被害からの復興を記念して建てられた「中津川治水碑」の碑文に初めて触れたときの感慨が思い起こされた。「是ヨリ後市民枕ヲ高クシ」で眠れるようにという祈りの言葉とともに、幼少の頃から親しんできた石造護岸を備えた中津川の風景が、どのような歴史的背景の下に成立してきたのか、蜘蛛の

巢にまみれた古碑は静かに物語っていた。その際に私が得たのは、まさに、困難に直面した先人たちの苦闘の所産によって、私たちは「生かされている」という感覚だったように思う。

三陸沿岸部で過去の津波に関する聞き取り調査を行っている、明治あるいは昭和の三陸地震津波を経験した親族から口を酸っぱくして言われたため、幼少の頃には毎晩欠かさず（不意の地震や津波に備えて）着替えを一式枕元に揃えてから床についたものだと話す方に出会うことが珍しくない。自身の経験を糧として、守るべき人たちに災害を生き抜く知恵を伝える。それこそが災害伝承や災害文化とよばれるものの、もっともプリミティブなあり方と言っても大過ないであろう。多くの部分を著者の実践知に裏打ちされた本書も、やはり同じように構造化されている。すなわち本書は「これからも生かされていく私たち」が著者から託されたバトンなのである。読了した我々に、少なくとも本書に述べられている範囲の事態

について、「想定外だった」という使い古された言い訳をすることは、もはや許されない。途轍もなく重いバトンであるが、それも当然である。その重みは、いのちの重みにほかならないのであるから。

著者から託されたバトンを、次の走者に届けるまで、握りしめて懸命に走り続けること。それこそが幸いにしてこれまで生かされてきた私たちが果たすべき務めであり、無念にもそれが果たせなかった災害犠牲者に報いるほとんど唯一の術なのではないだろうか。

末筆ながら本稿を執筆する機会をいただいた編集委員会と、本書をご恵贈いただいた盛岡出版コミュニティの栃内正行氏、そして本書を通じて大きな学恩を賜った齋藤徳美先生に、記して御礼申し上げます。

（岩手県立博物館 専門学芸調査員）